

【書評】

峯 明秀著『社会科授業改善の方法論改革研究
—資質形成の相違に応じた螺旋 PDCA サイクル—』

(風間書店, 2011年) 6,000円

児 玉 康 弘

(兵庫教育大学)

本書は、著者が2010年に広島大学へ提出した学位論文を、単著として公刊されたものである。本書は、以下のように構成されている。

- 序章 本研究の目的・意義・方法
- 第1章 社会科授業改善の研究方法
- 第2章 知識の量的拡大・効率化を図る授業 PDCA —社会事象, 社会機能, 社会構造についての知識を獲得する社会科—
- 第3章 学習者の内面の表出を図る授業 PDCA —社会における個人のあり方(行動)・生き方(態度)を理解する社会科—
- 第4章 知識の構造化・推論の組織化を図る授業 PDCA —社会の見方・考え方を探求する社会科—
- 第5章 価値的知識の明示化・価値判断の正当化を図る授業 PDCA —社会における個人のあり方(行動)・社会のあり方を追求する社会科—
- 第6章 自らの社会科授業観を相対化する PDCA
- 終章 社会科授業改善の方法論としての螺旋 PDCA サイクル

本研究の特色と意義として、以下の4点を指摘しておきたい。

第1は、PDCA サイクルという一般的な実践改善の方法論を、社会科授業改善の方法論として教科教育学研究のレベルで定式化している点である。著者は、社会科授業の目標・内容・方法の一貫性を担保した改善方法論を目指しているが、目標とされる市民的資質の多様性を認めている。そのため、目標とされる資質に応じた改善の4つのPDCAの方法論を、論理実証的な評価論と実験的な教育内容開発・改善方法論を結合・援用して、

一貫性のある改善モデルを提示することに成功している。

第2に、4つの異なる目標を持つ社会科授業のそれぞれについて、具体的な授業実践を事例として、授業観・授業の組織・授業の具体という抽象から具体を包括した総合的な観点から改善の手順をわかりやすく描き出している点である。往々にして、研究者は理念のレベルで、あるべき授業論を説き、実践者は個別具体の事象に対応した改善方法を求めがちであるが、著者は理論と実践を見事に結合させた構造的なPDCA サイクルを提示している。

第3に、授業改善方法論の選択化、換言すれば授業観の相対化を提案されていることである。授業者が特定の授業観を有していたとしても、授業の目標は、教育内容や子どもの実態、年間指導計画や単元の中での位置づけなどにより多様化せざるをえない。この度の授業は、どの目標・内容・方法でゆくのか、そのトータルな改善のためには、著者の提示している4つのモデルのどれが最も参考になるのか、次の異なる目標の授業とはどのような関係や位置づけが想定できるのか、など読者は選択的かつ広い観点から示唆を得ることができるのではないだろうか。

第4に、近年の社会科授業理論、例えば、社会形成論や合意形成論などに依拠した授業のための改善方法論開発への視座、あるいは可能性を切り開いているのではないかということである。それらは事前の指導案が作りにくいので、PDCA サイクルが特に大切になるからである。

本書の一読を、多くの社会科関係者に是非、お勧めしたい。